

# 握

りしめた拳。これを箱(box)に見立て、両拳を使う格闘法はボクシング

(boxing)と名づけられた。

頭部を含む上半身を、殴るのである。だから身体に危険を及ぼす可能性は、どんな格闘技にもまして、高い。パンチドランカー(打たれたことにより脳の機能が損なわれた人)になって日常生活に支障が出る選手も少なくない。

それでも、男たちはボクシングに情熱を傾ける。いったいなぜ? 東京・神楽坂の「帝拳ボクシングジム」を訪れる。エレベーターが開くと、もわっと広がる熱気と汗のにおい。サンドバッグを打ちこむパンチの音が響く。訪問時間に指定されたのは、昼間のアルバイトを終えた選手たちが集まる時刻。ボクシングで食べていける選手など、ごくごく一部なのである。ちなみにジムに女子トイレはない。

マネージャーが用意してくれた椅子で選手と向き合うと、拳が届く。インファイト(接近戦)の距離。この至近距離で敵と殴り合うのである。怖くないですか? 「いや、リングに上がればもう天狗になっている。いちばん怖いのは、試合の2〜3週間前かな。そこから試合に向けて、どんな体を作っていくんです。直前には勝ってる自分のイメージしかない」

そう語るのは、粟生隆寛君、22歳。3歳からボクシングを始

め、高校時代には史上初のアマチュア高校6冠を達成。プロ入りしてからもほぼ負け知らず、現在70連勝中である。

ボクシングの、何が楽しいの?

「相手との駆け引き、心の読み合いです。敵も自分のことを研究してくるから、そのウラを



©NANA

送っていけば鈍りゆくしかない本能を、彼らが全開にして暴れているように見えることにある。

暴れる、といっ

とかね。周りにはわからない、二人だけの緊張感ですわね」その駆け引きって、リングの外での人間関係にも応用できるの? 「笑。いや、リングの上だけで

でも、ボクシングほど制約の多い格闘技もない。18世紀の「ブロートン・コード」以来、危険防止のための厳格なルールが続々と定められた。ベルト以下の攻撃の禁止、

背中側攻撃の禁止、目突き禁止など。制約だらけのなかで、本能全開の戦いをする。その難しさ、ボクシングが「フール・アット(高貴なる技芸)」とも呼ばれるゆえん。それにしてもプロは大勢のファンが見守るなか、リングの上に立つんですよ。どんな気持ち? 「オレという作品を出す感じかな。もってオレを見てくれてね」

姿を思い浮かべてしまった。リングに立つボクサーは、まさしく「作品品」。そういえばボクシング映画には、「どん底からの這い上がり」系が少なくない。あれは一種の比喩では、とも見たくなる。恐怖でいっぱいのだん底の心身を、スティックに絞り、鍛え、研ぎ澄まし、晴れてリングに上る。その長く厳しい過程に思いを巡らすと、リング上での本能全開の高貴なる技芸が、崇高な舞のようにも見えてきます。



(右上)『ロッキー』はどん底からの這い上がり度一番。(左上)実話をもとにした映画『シンデレラ・マン』。(右下)3歳でボクシングを始めたという帝拳ジムの粟生(あおう)君。11月13日には日本武道館で、日本王座前哨戦になるといわれている試合に臨む。(写真提供: ワールド・ボクシング)

# Sanctuary of the Lost Samurai

中野香織の  
“落日のマッチョ”

## リングに舞うマッチョは本能全開の「作品」

最近女子プロボクサーもいるけれど、リングの上にはやっぱりマッチョたちの勇姿が似合う。なぜ、彼らは殴り、殴られるのだろうか。

Text by Kaori Nakano



©NANA

中野香織 (なかの・かおり)

服飾史家・コラムニスト。1962年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得。英国ケンブリッジ大学客員研究員を経て文筆業に。ウェブマガジンhttp://openers.jp/にてフレグランスの魅力をこぼして伝える試み「フレグランス道場」を開始。